



Faculty Publications

2011-9

Saigyo no uchinaru Basho: Saigyoka ni okeru haikai imajineshon
西行の内なる芭蕉：西行歌に於ける俳諧イマジネーション (The
Basho Within: Haikai Imagination in Saigyo's Poetry)

Jack C. Stoneman
Brigham Young University, jackstoneman@byu.edu

Follow this and additional works at: <https://scholarsarchive.byu.edu/facpub>



Part of the [Japanese Studies Commons](#)

BYU ScholarsArchive Citation

Stoneman, Jack C., "Saigyo no uchinaru Basho: Saigyoka ni okeru haikai imajineshon 西行の内なる芭蕉：西行歌に於ける俳諧イマジネーション (The Basho Within: Haikai Imagination in Saigyo's Poetry)" (2011). *Faculty Publications*. 5408.
<https://scholarsarchive.byu.edu/facpub/5408>

This Peer-Reviewed Article is brought to you for free and open access by BYU ScholarsArchive. It has been accepted for inclusion in Faculty Publications by an authorized administrator of BYU ScholarsArchive. For more information, please contact ellen_amatangelo@byu.edu.

なむ後の煙に、この経を薪に積み具せむと思ふなり」など仰せらる。よしなき妄念もむつかしく、「ただ一仏の蓮の縁をこそ」と申せば、「いさや、なほこの道のなごり惜しきにより、今一度人間に生を享けばやと思ひ定め、…」（とはすがたり巻三）

*和歌の引用は、西行の家集、歌合については『西行全集』（久保田淳編）、勅撰集は『新編国歌大観』によるが、便宜上、適宜、表記を改めた箇所がある。また覚一本『平家物語』とはすがたり『俊頼髓』は新編日本古典文学全集、『宝物集』『今昔物語集』は新日本古典文学大系、『源平盛衰記』は新人物往来社版をそれぞれ用いた。

（ひらた・ひでお／藤女子大学）

西行のうちなる芭蕉

— 西行歌に於ける俳諧イマジネーション —

研究論文

ジャック・ストーンマン

キーワード

俳諧的想像力 歌語 俗語 中央 外辺

一 橡ひろふ

芭蕉は『おくの細道』の道中、須賀川のあたりに隠棲していた栗斎という僧侶の庵を訪れた。「この宿の傍に、大キ成栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。橡ひろふ太山もかくやとしづかに覚えられて」と記し、「橡ひろふ」と詠んだ西行を偲んで、

世の人の見付けぬ花や軒の栗

の一句を詠んでいる（※★）。芭蕉のように、中世の連歌師や近世の俳諧師は、旅の途中で、西行を想う契機をしばしば見出しているが、それは『西行物語』が西行の人生を旅に尽くしたものと描写して以来、実に鎌倉時代から今日に至るまで、根強くある西行像によるものだと言えよう。

西行を模して旅に出た歌人のうち、芭蕉は遅参者にしろ、最も有名な西行ファンではないだろうか。芭蕉にとって、旅は、物事の心を看破した句を詠む必須条件だった。『許六を送る詞』では、「古しへより風雅に情ある人々は、後ろに笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、

物の実をすることをよるこべり」と書いている(注*)。目崎徳衛は「芭蕉のうちなる西行」という論文で、先ほどの句などは、芭蕉の西行に対する敬慕と、西行が訪れた地を自分の眼で見た実感とが契機となって詠まれたのだと、説いている(注*)。芭蕉はまた、『許六を送る詞』の数日前に書いた『許六離別詞』のなかで、空海を踏まえた次の有名な文句を残した。「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ」(注*)。これは、古人が求めた場所や心境を再び求めて、「眼前に古人の心を聞かず」(注*)というプロセスをさしているが、古人の心を聞かずというのは、ただ実地に足を運ぶ体験的なアプローチだけではなく、古人が残したことばの森に踏み入る勉強でもあったのである。

二 俳諧イマジネーション

本稿では、ハルオ・シラネが『芭蕉の風景・文化の記憶』で提唱する「俳諧的想像力」という俳諧論を逆方向に適用し、西行の「山深み」連作歌と海人を詠んだ歌群を分析する事によって、西行に於ける俳諧的想像力の発掘を試み、芭蕉は西行の単なる同行者ではなく、想像力とことばの後継者であったことを提示したいと思う。

資料として、西行が高野に隠居していた頃、大原に籠もっていた寂然に贈った「山深み」を初句に据えた歌十首と、瀬戸内海や伊勢の旅で海人を詠んだ歌二十八首を付録1と付録2に収めた。

形成するのである。

氏はロシアの評論家ミハイル・パフチンの「テログロツシア・ダイグロツシア」という概念を借りて、俳諧の言語的・思想的様相を解説している(注*)。ヘテログロツシアとダイグロツシアとは、単一の詞や表現に、二種ないし多種のロゴス・意味のベクトルを包含するという言語現象である。例として、かの

夏草や兵共が夢の跡(注*)

の「夏草」には伝統和歌のベクトルと漢詩のベクトルとが共存する。「茂る」、「結ぶ」、「契る」、「深く」などを縁語として持つ、恋を匂わす歌ことばの「夏草」でありながら、杜甫の「国破山河在、城春草木深」の詩句にも依っている。より豊富な表現になっている。それだけでなく、多種の言説様態、つまり「王朝和歌・国史」と「漢詩・中国史」を同時に「夏草」に包含させている。

さらに、氏は芭蕉俳諧の詩的プロセスを「異化と再親化」と名づける。すなわち、

習慣化し約束事化した知覚を転位させるといふ異化作用 (defamiliarization) と、確立された詩的主題を作り変えてあらたな言語や物質文化のなかに再編成するという再親化作用 (refamiliarization) である。(注*)

たとえば、「夏草や」には、草が茂るイメージが歌ことばの機

まず、シラネが論ずる「俳諧的想像力」とは何であろうか。少し長くなるが、氏の説明を引用することにしよう。

この俳諧的想像力は、十七世紀に台頭した、主として都市の、町人や武士に基盤を置くあらたな民衆的文化と、一方、俳諧その他の民衆的ジャンルによるパロディや変形となり、当時の言語や表現形式へと移し変換されつつあった古典伝統の残滓とが、相互に影響しあうなかから生れたのだった。

俳諧的想像力はこのような一見不調和な世界や言語をこのんで並置し衝突させ、確立された文化的連想や約束事、なかでも古典的歌題の「本意」を、ユーモラスに転倒して作りにかえた。(注*)

たとえば、

蚤虱馬の尿する枕もと(注*)

では、伝統的歌ことばである「枕」を俗語の「蚤」、「虱」、「尿」と併置し衝突させることによって「一見不調和な世界」を詠んでいる。王朝和歌に頻出する「枕」の縁語・連想として夢、涙、草、露などがあり、本意は恋または旅である。芭蕉はあえて伝統的な縁語ではなく、卑語を据えた結果、型通りの「旅」の概念を覆すとともに俳諧に相応しい生々しい、しかもユーモラスな経験を描写し、古典・伝統の歌ことば「枕」と感慨「旅」を再

能によって恋を思わせる。しかし、一方では縁語の「刈り」と同音の「仮」という掛詞があり、兵共もその夢も仮初めのものだという表現が可能なのであった。にもかかわらず、芭蕉は王朝和歌の措辞・表現世界を隔てた漢詩のことばを連想させることによって、類型的な「夏草」の本意である恋を抑えることで異化作用をなすとげる。つまり、読者の期待を逸らすことがこの句の効果のひとつである。そして、杜甫の詩句を見てみると、やはり草の茂みは恋を象徴するものではなく、国が破れても時が流れる、兵共が死んでも草木が春になって青々と生い茂る、という意味をも持つ自然景物となる。こうして「夏草」の本来の「茂み」の趣意が伝統的歌ことばと漢詩という多様な言説様態の配合によってより多様な表現として再親化されるのである。

シラネが論ずる芭蕉俳諧を踏まえた上で、西行の歌の中に潜在する俳諧的想像力を探るため、次の五つの様相に沿って分析を進めたい。

- 1 併置・衝突 (juxtaposition)
- 2 二種共存言語体 (diglossia)・異種共存言語体 (heteroglossia)
- 3 多様な言説様態 (discursive plurality)
- 4 遊び心・言葉遊び (word play)
- 5 中央・外辺と異化・再親化 (center/periphery & defamiliarization/refamiliarization)

三 西行のうちなる芭蕉

1 併置・衝突

俳諧が併置と衝突を好むようになった理由として、江戸初期に於ける印刷の開発や王朝文化への憧憬といった気運によって、平安時代の古典をはじめ、それまで貴族階級の文化が下の社会階級にも及んだことと、そして都市空間に町人と武士が住み合うようになって、その価値観・文化観が合流したことなどが、挙げられる。こういうコンテクストのなかで、俳諧はさまざまな言説圏域からことは・観念・表現を採り合わせ、シラネがいうダブル・ヴィジョン（複視の文学）やハイブリッド・ランゲージ（異種混成的な表現形式）といった多声的な表現形式を構築してゆく。

しかしながら、こういう社会階級や多種文化の変動・触れ合いの影響が歌ことばに現れる例は、早く西行の歌に見られるのである。例をあげると、「山深み」の一連の歌は、西行が高野の山奥に実際に住んで経験した野生的な環境によって、平安時代の先行歌が提示した隠遁の景色や心境をもとに西行自身が抱いていた風雅な隠者暮らしのイメージが覆されたことを契機に、二つの世界、つまり京周辺の遁世者が歌で詠む隠棲と、中央を遠く離れた修行僧が体験する深山の隠棲とのズレを詠んだ連作歌である。

第1199歌（まじり）

山深みまきの葉わくる月かげははげしきものすごきなり
けり（まじり）

は併置・衝突の好例である。上の句の「まきの葉わくる」は先例のない表現であるが、慈円はこのフレーズを『千載集』入集の歌につかつており、伝統的和歌のレキシコンにふさわしい優雅な表現であると言えよう。「月影」はもちろん伝統的な歌ことばであり、隠者の歌にあつておかしくないのである。しかし、その月の光を修飾する形容詞として、「はげしき」と「すごき」という歌に珍しいことばを両方据えたのは、なんと大胆な詠みぶりであろう。伝統的なイメージが目の前で変身する、読み手の予想を裏切る、詠み方である。これは、俳諧に頻出するパターンでもある。

第1202歌、

山深み岩にしたたる水とめむかつかつ落つる椽ひろふほど

は、冒頭の句で芭蕉がふまえた歌である。上の句は「岩にしたたる」という珍しい表現を使っているにしても、伝統和歌に似つかわしいところよいイメージだといえるが、下の句の「かつかつ落つる」という擬音語、そしてあまりに賤民的な「椽ひろふ」の表現によって、いかにも俳諧らしい、雅と俗をぶつけ合わせた歌にしているのである。

さらに、西行は十首の連続に、俳諧連句のような、押ししたり引いたりしながら進行する動きを仕組んでいる。最初の第11

98歌、

山深みさこそあらめときこえつつ音あはれなる谷川の水

は音を中心に詠んだ歌であり、次の第1199歌（前述）「まきの葉わくる月かげ」は視界を中心にし、次の第1200歌、

山深み窓のつれづれとふものは色づきそむるはじの立ち枝

でまた視界を優先するものの、次の第1201歌に続く五首、

山深み苔の筵の上にあて何心なく啼く猿かな

山深み岩にしたたる水とめむかつかつ落つる椽ひろふほど

山深みけちかき鳥のおとはせで物おそろしきふくろふのこ

ゑ

山深み木暗き峯の梢よりものしくもわたるあらしか

山深み梢切るなりと聞えつつところには斧の音かな

は音を中心によまれている。結びの前の第1206歌、

山深み入りて見と見るものは皆あはれもよほすけしきなる

かな

で視界に戻る。

また、一首ごとの歌の心も変動して行く。快い「あはれなる

谷川の水」から、ちよつと怖い「はげしきものすごき」月影、それからなごやかな「窓のつれづれ」に続く「啼く猿」の騒音。騒音の後にはまた穏やかな「椽拾ひ」、それからまたいささか怖い「ふくろふの声」が登場する。これに「嵐」が一層音の激しさを増し、「斧の音」が加わって騒音が続く。しかし、結びの前の歌で音も恐怖も消えて「見と見るものはみなあはれもよほすけしき」だといひ、最後に不慣れた動物も西行の存在に慣れてしまい、自分が「世に遠ざかるほど」を教えてくれるのである。この十首のあてられた寂然が寂しさや人こいしさといった伝統的な隠棲の歌によくある心境を表現することに専念しているのに対し、西行は寂しさを賑わい、哀れ、恐怖、吃驚など実に多彩な心境を詠んでいる。

2 二種共存言語体・異種共存言語体

ダイグロッシアとは、ある単語のなかに二つ（または二つ以上）の意味のベクトルを含むことであるが、これは周知の掛詞にも当てはまるのである。一例をあげると、四国で海人を詠んだ第1373歌、

下り立ちて浦田に拾ふ海人の子はつみより罪を習ふ成けり

は、海人の子達が拾っている「ツミ」と殺生罪の「罪」を掛けている。これに対し、ヘテログロッシアは、ことばだけではなく、一首のなかに異なった言説圏域から生れたことばが合流し、それぞれの世界の衝突によってできる狭間に生じる新しい意

味・イメージをさす。たとえば、第1201歌(前述)では、「昔の筵」と「啼く猿」という先例のないコンビネーションを組んでいる。「昔の筵」は遁世や旅の歌によくある表現であるが、

通常はそこに居たり寝たりするのは啼く猿ではなく、隠者や旅人である。ここでは、和歌の表現・措辞の世界の「昔の筵」が、特定のイメージを引き出す機能を為さず、「啼く猿」という、野生を生で観察する経験から生れた意外なことは衝突して、読み手の予想・期待を転位させている。互いのことは世界の狭間で生じる新たな意味の一つに、猿と歌人のアイデンティティークライシスのような読みがあげられる。昔の筵の上にいるはずなのは自分の遁世生活を詠んでいる歌人であるが、猿がそこに坐って啼いている。歌人は猿と意識を同じくしているであろうか。あるいはまた、歌人は本物の隠者ではなく、猿こそが野性的自然のものであり、本統の遁世をしているのであろうか。このような極めて面白い解釈がヘテログロシアやことは衝突によってできるのである。

3 多種言説様態

ヘテログロシア・ダイグロシアや併置・衝突は、多種言説様態を導く措辞法である。海人の歌群は、特に多種の言説様態、つまり、さまざまなことばの世界を描いている(付録2)。これらの世界は、主に、

- ・ 和歌表現(歌ことば)、
- ・ 西行が目と耳にした海の自然物体と文化の表現、
- ・ 仏教から来る罪悪感の表現、

田一枚うゑて立ちさる柳かな

この句は芭蕉が農民を見ているか、または実際に田植えに携わっているか、説が分かれる。どちらでもいいのだが、句の表現するところは芭蕉の緊張する自己―歌人西行の風流を純粹に味わって、田植えをただ時間を計るために見ている観察者か、王朝和歌を遙かに離れた田植えの世界に溶け込んだ旅人か、

風流の初やおくの田植うた

と詠んだ芭蕉である(注5)。

4 遊び心・言葉遊び

前述の海人の歌の例で明らかであろうが、ひとつ付け加えるならば、言葉遊びはユーモアを作り出さなくても言葉遊びであるという点である。シリアスな遊び心というべきだろうか。これは、芭蕉俳諧にも通じると思われる。たとえば、『奥の細道』の最後の句、

蛤のふたみに別行秋ぞ

は、西行の漁の歌のように、ことばの洒落とともに、重さのある表現が内包する(注6)。「山深み」の連作も、実に哀れな心に満ちた歌群でありながら、ことばで遊ぶ傾向が強いのである。

・ 歌謡・民謡から来る遊び心の表現から構成されている。第1374歌、

真鍋より塩飽へ通ふ商人は罪を權にて渡る成けり

はまた「罪」と「積み」をかけ、そして「權」と商人の縁語の「買い」を掛けている。次の第1375歌、

同じくは牡蠣をぞ刺して乾しめすべき蛤よりは名も頼り有
で西行の言葉遊びが一層色濃くなる。同じく殺生成を破るのなら、軽い方の果物の柿を乾したらいというのである。これはこの海人の歌や伊勢の海の歌によく見られる、なかなか軽妙な口ぶりである。さらに、第1380、1381歌、

海人の磯して帰る引敷物は小蝦蛤寄居虫細螺
磯菜摘まん今生ひ初る若布海苔海松布神馬草鹿尾菜心太

の二首は歌謡的な物尽くしであり、西行はこの海人の罪の業を誘ると同時に言葉の洒落をしながら漁村の住民と一緒に収穫を祝っているのである。そして山本章博が「西行と海浜の人々」で示すように、西行は漁師に説教をでもしているかもしれない(注7)。複雑な立場というか、民衆の仲間か観察者か、歌詠みの緊張する自己意識を表現した、いかにも芭蕉のような作風である。たとえば、『奥の細道』の次の句がある(注8)。

5 中央・外辺と異化・再親化

和歌には風景にも詠み方にも中央とその中枢から輪が広がっていく周辺と奥地がある(注9)。王朝和歌はあくまでも詞からなる文芸であり、自然を描写するものではなかった。歌人は限られたことばで歌を作り、その歌ことばのカノンを形成したのは平安初期の三代集であった。こういった中央文化の影響から遠ざかっていく傾向はすでに平安末期に見られていた。西行は、環境と芸術の両方においてこれを果たす。つまり、都を離れ、野生の山に身を置き、歌の表現においても、王朝和歌の世界をみごとに脱出したのである。「山深み」十首は、あたかもそのプロセスを浮き彫りにしているようである(付録1)。

『山深み』の歌を通して読むとまず気づくであろうことは、隠遁の場としての山里や草庵に関係する歌ことばを西行がほとんど避けていることである。たとえば、「草の庵」「雪」「風」とふ人「けぶり」「やまぢ」「つゆ」など隠棲の歌に類出することばは全く見当たらない。それだけではなく、西行は、隠棲の歌に親しみのあることばを遣った場合、そのことばに特殊な扱いを施すことによつて、その親しみを打ち消そうとしているのである。例を挙げると、月を詠んだ歌には、普段月影を修飾しない「はげしき」「すごき」のような形容詞を据えている。また、紅葉の歌には「はじ」といふ、和歌には非常に少ない木を選び、さらには、「はじ」を修飾することばとして先例のひとつしかない「色づきそむる」を据えたのである。そして鹿は、常例の縁語である「なく」や「秋」などを詠まず、「なるるかせぎ」という特殊な表現にしている。西行は他にも画期的なことば遣

いをしており、定例に違反する程に伝統を破ることは大胆に選んでいる。西行は、この十首の歌の中で、先例のない次の語句を用い、

あはれなる谷川の水　ふくろふ
まきの葉わくる　櫛きる
窓のつれづれ　見と見る物
あはれもよほす　岩にしたたる
馴るるかせぎ

他に用例なしの次の語句を使っている(※*)。

月かげはげしき　苔のむしろ+ましら
水とめむ　かつかつ
椽ひろふ　木暗き
ものものしく　ところにぎはふ
世に遠ざかる

つづいて、海人を詠んだ歌を読むと、西行が中央を離れ外辺を彷徨って辺境地方の文化をどれほど味わったかが解るであろう。「山深み」の歌群のように、ことは遣いが特殊である。他に用例がない歌語は、

初竿　磯して
小鯛　江鯛

になる。このように、和歌の伝統的な題や約束事とされてきたイメージや歌語を転位・変動させることによって、外辺に身を置きながら自分の歌のなかでも中央の歌を異化させる (De-militarize) ことを果たしている。

それでは、再親化はどうかというと、西行は、主流文化の文芸である和歌によって、野性的かつ民衆的風景を描くことで、やはり中央に向かう視点から自然環境を表現しているのである。宇津木言行が「西行のことば」で歌に非常に珍しい民俗語・職掌語・宗教語を採り上げて分析した後、指摘するように、「もとより西行はいたずらに珍奇なことばによって人の耳目を驚かせようとする性質の歌人ではない。歌ことばによる歌らしい表現を志すところに本領があったのであり、残された歌の多くは古今集の伝統の範囲内に収まる詠歌であることは動かしがたい」(※*)。西行は、歌の表現の境界を広げながらも歌という詩ジャンルを脱出しない。宇津木はまた、「しかしその枠内からはみ出してしまいう傾向を有していたこともまた確かであり、伝統の規格を外れて歌ことばにあらざることを取り用いて歌おうとするとき、その特色、個性が際立つとも見られるから、西行の全体像を捉えるためには特殊語彙に依拠した歌の考察にも相応の意義があるであろう」と提示する(※*)。西行は王朝和歌を脱却するどころか、さまざまの言説様態からことばや表現を取り入れることによって自分の歌の世界を多形化し、王朝和歌・仏教経典・民衆・遁世・旅という多種の文化を併置し衝突させている。結果として、平安末期に現れつつあった社会・文化の多様化と和歌文学の多様化が西行歌に反映されているの

などがあり、用例が少ない歌語は、

櫛　蛤
岩壺　榮螺
桜鯛　西北風

などがある。また、海の旅で詠んだ歌枕のほとんどは、歌には珍しい場所であり、あるいは他に用例のない地名である。海人の歌で詠んだ地名のなか、

浦田　真鍋
塩飽　塩崎の浦
菅島　答志
鷺島　香良洲崎
二見の浦　伊良胡崎

正式な歌枕といえるのは二見の浦くらいである。

この二つの歌群において、西行は通常の草庵生活の歌や海人の歌の縁語や連想を、ある歌では避けて、あらたなことばを使うことによって読み手の予想を裏切り、またある歌ではありきたりのことばを据えながらもそれに伝統的な和歌にないことばや民衆語(俗語)を併置し衝突させることによってより複雑な表現にしている。この作風では、歌を詠む場所が京から遠ざかっているとにも、ことは遣いも中央から距離を置いていること

である。中央や伝統を異化させるために辺境に出て、そこで出会ったイメージやことばを歌に詠んだのだ。中央を代表するジャンルである和歌の様式とことばを利用して、その表現の世界を多形化・多様化することによって再親化をなしてあげている。それは、遠心力と求心力の緊張の中で生れる文学だといえよう。

四 結び

さて、西行はなぜ特殊で画期的なことばを歌に取り入れたのであろうか。西行の表現の世界の土台となるのは何であらうか。それが見いだされると芭蕉の俳諧的想像力の基礎も明らかになるのではないだろうか。宇津木が指摘する通り、「西行その人が境を越えようとする心の持ち主であったことが理由のひとつである」(※*)。賛成の意を示したいものだが、性格だけではそこはかかない論になり兼ねない。だから、宇津木や前述の山本章博、そして本稿で示した、旅して多彩な文化・民衆と接してその経験や歌に活かすことによって生まれる新たな歌ことばというプロセスに注意を向けたい。

西行ほどではないにしても、旅に出て歌を詠んだ歌人は平安・中世にいくらでも在った。しかし、西行ほど精密に民俗の習慣を観察し、深山の隠棲や海浜の生業の物質的かつ身体的文化、その独特な言語(宇津木がいう「民俗語・職掌語」)を身につけ、歌に積極的に採り入れた歌人はおそらくなかっただろう。旅や隠居はこの歌ことばの世界の多形化を可能にしたとはいえ、やはり歌人の詩的アプローチ、つまりモノを見てコトバで反応す

その根本的な芸術心の機能がもつとも大事だと思える。西行と芭蕉とが細やかに自然を観察した詩人だったと幾度も指摘されて来たが、それにもまして人間とその言語を細密に吟味し歌に活かした詩人である。そういうヒューマニズムの詩心の働きとは西行・芭蕉が共有するものだと思われる。

前述のような社会・文化と詩的表現の多様化は、江戸初期、特に芭蕉の生きた元禄時代に見られる。つまり、西行と芭蕉はツァイトガイスト・時代性を共にしていると言えるが、それだけではなく、二人はランゲージ・風景・詩的プロセスへのアプローチも共にしていた。芭蕉の西行享受は、行脚して同じ名所を見て句を詠んだことに尽くされない。それだけでは、ポエティックツーリズム、つまり詩興観光に過ぎないのではないか。芭蕉が西行を享受したプロセスは、体を使って先達者の旅路を自分の足と目で辿ると同時に、深く西行のことばの森、つまりその詩心に通じたことでもあったと思われる。

「山深み」と海人の歌は、実に西行と芭蕉に共通する詩的プロセスをあらわにしている。たとえば、西行の海人の歌の詞書を見ると(付録2)、旅のみちのりなどを述べ、旅中に出会った地元住民と接して聞いた話や現地語を説明している。物語性に富んだ詞書である。また、「山深み」の歌群は、西行が馴致されえぬ深山に身を置いて、新しい遁世の世界を体験・観察し、伝統的な歌ことばでは表現できない風景を描いているものである。芭蕉も単なる漂泊心のため旅に出たわけではない。常に新しい風景、新しい人との出会いを求めて、その触れ合いによって新しいことばや表現を得たのである。中央を脱出し、海濱や

深山を彷徨い、自分の詩心を養うため、ここかしこのことばの森に踏み入り、世の人の見つけぬ花を見つけ、多彩な詩のことばの世界を築き上げることが、歌聖西行と俳聖芭蕉の業だったといえるであろう。

付録1 「山里」贈答歌 『山家集』1198~1217

- 入道寂然、大原に住み侍りけるに、高野よりつかはしける
- 1208 西行 山深みさこそあらめときこえつつおとあはれなる谷川の水
- 1208 寂然 あはれさはかうやと君も思ひやれ秋くれがたの大原の里
- 1209 西行 山深みまきの葉わくる月かげははげしきものすこきなりけり
- 1209 寂然 ひとりすむおぼろの清水友としては月をぞすまず大原の里
- 1200 西行 山深み窓のつれづれとふものは色づきそむるはじの立ち枝
- 1210 寂然 炭がまのたなびくけぶり一寸ちに心ほそきは大原の里
- 1201 西行 山深み昔の筵の上にあて何心なく啼く猿かな
- 1211 寂然 何となく露そこぼるる秋の田にひたひきならず大原の里
- 1202 西行 山深み岩にしたたる水とめむかつかつ落つる椽ひろふほど
- 1212 寂然 水の音は枕に落つる心地して寝覚めがちなる大原の里
- 1203 西行 山深みげちかき鳥のおとはせで物おそろしきふくろ

ふのこゑ

- 1213 寂然 あだによく草の庵のあはれより袖に露おく大原の里
- 1204 西行 山深み木暗き峯の梢よりものしくもわたるあらしか
- 1214 寂然 山風に峯のさき栗はらはらと庭におちしく大原の里
- 1205 西行 山深み梢切るなりと聞えつつところにぎはふ斧の音かな
- 1215 寂然 ますらをが爪木にあげびさしそえて暮るればかへる大原の里
- 1206 西行 山深み入りて見と見るものは皆あはれもよほすけしきなるかな
- 1216 寂然 むぐら這ふ門は木の葉に埋もれて人もさし来ぬ大原の里
- 1207 西行 山深み馴るるかせぎのけ近きに世に遠さかるほどぞ知らるる
- 1217 寂然 もろともにも秋も山路も深ければしかぞかなしき大原の里

付録2 海人の歌群 『山家集』雑 1372~1398

- 備前国に小島と申島に渡りたりけるに、あみと申物を採る所は、おのく、われく、占めて、長き竿に袋を付けて立て渡す也、その竿の立て始めをば一の竿とぞ名付たる、中に年高き海人の立て初る也、立つるとて申なることば聞き侍しこそ、涙こぼれて申ばかりなく覚てよみける
- 1378 小鯛引く網の浮繩寄り来めり憂き仕業ある塩崎の浦
- 1379 霞敷く浪の初花折りかけて桜鯛釣る沖の海人舟
- 1380 海人の磯して帰る引敷物は小螺蛤寄居虫細螺こはまがらぎうましたまご
- 1381 磯菜摘まん今生ひ初る若布海苔海松布神馬草鹿尾菜心太伊勢の答志と申島には小石の白の限り侍浜にて、黒はひとつも混じらず、向ひて菅島と申は黒の限り侍

- 1382 菅島や答志の小石分替へて黑白混ぜよ浦の浜風
 1383 鶯島の小石の白を高波の答志の浜に打寄せける
 1384 香良洲崎の浜の小石と思載白も混じらぬ菅島の黒
 1385 合はせばや鶯を鳥と碁を打たば答志菅島黒白の浜
 伊勢の二見の浦にさるやうなる女の童共の集まり
 て、わざとのおぼしく蛤を採り集めけるを、
 言ふ効なき海人こそあらめ、うたてきこと成と申け
 れば、貝合に京より人の申させ給たれば、選りつゝ
 採るなりと申けるに
- 1386 今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合とて覆ふ成けり
 伊良胡へ渡りたりけるに、蛤貝と申蛤に、阿古屋の
 むねと侍なり、それを取りたる殻を高く積みおきた
 りけるを見て
- 1387 阿古屋取る蛤貝の殻を積みおきて宝の跡を見する成けり
 沖の方より風の悪しきとて、鰹と申魚釣りける舟ど
 もの帰りけるを見て
- 1388 伊良胡崎に鰹釣舟並び浮きて西北風の波に浮かびてぞ寄る
 1389 菓鷹渡る伊良胡が崎を疑ひてなほ木に帰る山帰り哉
 1390 鶴のすゞるがさでも古させて据ゑたる人のありがたの世や
 宇治川を下りける舟の、金突と申物を以て鰹の下る
 を突きけるを見て
- 1391 宇治川の早瀬落ち舞ふ漁舟の金突に連ふ鰹の村まけ
 1392 小籠集ふ沼の入江の藻の下は人漬けおかぬ柴にぞ有ける
 1393 種漬くる壺井の水の引く末に江鮒集まる落合の曲

注

- 1394 白繩に小鮎引かれて下る瀬にもち設けたる小目の敷網
 1395 見るも憂きは鶴繩に逃ぐる魚類を逃らかさでもしたむ持網
 1396 秋風に鱸釣舟走るめりその一箸の名残慕ひて
 新宮より伊勢の方へまかりけるに、三木島に舟の沙
 汰しける浦人の、黒き髪は一筋もなかりけるを呼び
 寄せて
- 1397 年経たる浦の海人言問はん浪を潜きて幾世過ぎにき
 1398 黒髪は過ると見えし白波を潜きて渡る身には知海人
- (1) 『新編日本古典文学全集』71巻85～86頁
 (2) 同、339～340頁
 (3) 目崎徳衛「芭蕉のうちなる西行」『芭蕉のうちなる西行―
 通世・数寄・漂泊の系譜』角川書店、一九九二) 11～22頁
 (4) 注(1)同、338～339頁
 (5) 注(1)同、93頁
 (6) ハルオ・シラネ(衣笠正晃訳)『芭蕉の風景・文化の記憶』(角
 川書店、二〇〇二) 40～41頁
 (7) 注(1)同、101頁
 (8) ミハイル・パフチン、桑野隆、小林潔『パフチン言語論入門』
 (せりか書房、二〇〇二) 参照
 (9) 注(1)同、100頁
 (10) 注(6)同、49頁
 (11) 西行歌番号は『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2(角川書店、
 二〇〇三)に拠る。

- (12) 「わくる」はテキストによって「わたる」(茨城大学附属図
 書館蔵『山家集』)や「つくる」(『玄玉集』三卷)の校異がある。
 (13) 山本章博「西行と海浜の人々」『西行学』一、二〇一〇・七、
 91～104頁)
 (14) 注(1)同、84頁
 (15) 同、85頁
 (16) 同、122頁
 (17) 和歌世界の中央・外辺と西行の歌を、「中世和歌に於ける二
 次的自然と野生的自然―西行・寂然の(山里)贈答歌を中心に」(『マ
 シマ遊学』143、二〇一〇・七)と“So Deep in the Mountains:
 Saigyō's *Yama Fukami* Poems and Reclusion in Medieval Japanese
 Poetry” (Harvard Journal of Asiatic Studies Vol. 68, No. 2 (12, 2008),
 pp. 33-75)で詳しく述べられている。
 (18) 語彙の検索は『新編国歌大観』に拠る。注(17)の拙論も
 参照された。
 (19) 宇津木言行「西行のことば―民俗語・職掌語・宗教語に注
 目して」『西行学』一、二〇一〇・八、115頁)
 (20) 同
 (21) 同、105頁

(Jack Stoneman / ブリガム・ヤング大学)